

# 北海道アイヌ口承文芸「人助け樹木神」について

安田 千夏

はじめに

アイヌの人々が神と考える対象には有形無形の様々な存在がある。架空の神や自然現象などの神が存在する一方で、実際の生物に同定できる神々も数多存在し、そうした生物神がアイヌの信仰に占める位置には大きなものがある。

生物ではヒゲマ、シャチ、大型の猛禽類などが、神格が高いとされる代表的な神である。こうした生物神が、アイヌ口承文芸において主人公である人と様々な形で関わるいくつかのモチーフが存在する。樹木神もアイヌ文化においては伝統的な儀式の場において病魔祓いやまじないの際に主神として祀られる存在であり、口承文芸資料でも人との関わりが少なからず描かれる神である。しかしひとくちに樹木神といっても自然界では様々な種が存在するというのはいままでの自然界では神格が高いとされているわけではなく、「どの木が口承文芸によ

く登場するか」「どの木が『重要』か」を紹介した文献を見ても、その種にはばらつきが見られる。そこでこうした問題について、改めて口承文芸資料を用い原点に立ち戻って考えてみることにした。

データを整理していく過程で、ひとつの伝承パターンに目が止まった。それは「木にくっついて育った男の子」という括りでまとめられ、静内地方、沙流地方で採録例がある。この一連の伝承にみられる語りの特徴は、樹種名の問題を考えるうえでの根本的な問題を内包していると考えられたので、本稿の主なテーマとして取り上げることとした。

## 一、樹木神伝承についての先行研究

アイヌの樹木信仰について「アイヌの炉辺物語」（バチエラー 一九二五）には次のような話が掲載されている。

## 第二十九章 守護樹に就いて

初めて私がアイヌの處に來た時食物を得る必要上から山に鳥や兎を射ちに行く事があります。斯る場合には當に一名の従者を伴ふて参ります。或る時は熊の居る處にも行つたこともありましたが熊に襲はれる場合如何に處すべきかを私の連れの者が私に教へました。山に於ての祈りを知らないアイヌが熊狩りに行き熊に襲はれた場合は如何に逃げ走つても遂に熊に捕へられて殺されて了ひます。併し其の祈りを知つて居る者は度々熊に襲はれても直ちに逃れる事が出来ず。即ち、「山の祈り」は樹木に對して献げられるもので樹木の立つて居る場所を選び斯く祈ります。

「木の神の送り給ふた者よ速かに我を隠せよ」

斯う言つて木に抱きつくと例へ熊が襲ふて來ても木の間近まで來て人間を發見せずに歸つて行きます。

アイヌ文化で陸生哺乳類最大最強の存在であるヒグマに襲われた時に樹木神が助けてくれるというのは通常的感覺でいうと現実離れた話であるが、これはアイヌの散文説話に實際に存在するモチーフである。しかしここでバチエラーは口承文芸としてではなく、實際にヒグマに襲われた場合の対処としてある点に興味深い。筆者のデータ整理上の経験では、聞き取り調査において伝承者に生活誌を聞いているうちに、いつの間にか散文説話の世界に話が入り込んでいて、現実と伝承の境目がはつき

りしなくなることもある。この記述はその例といえるのかも知れない。少なくともこの話は現実から切り離された空想的な話として聞くものではないということはあるであろうし、本稿で口承文芸資料を分析対象とした理由もそこにある。

アイヌ文化における植物研究の金字塔とも言えるのが「分類アイヌ語辞典 植物編（知里一九五三）」である。植物学的な分類により項目を立て、アイヌ語の方言差を明示し、植物の単なる利用法の記録に留まらずアイヌ口承文芸に描かれた植物神の具体例を紹介し大系的な辞典の編纂を目指した。しかしデータの蓄積が十分ではなかったという時代的な制約もさることながら、個人で辞典を編纂するという大事業には限界があつたであろうことは否めない。例えばハルニレの項には7ページほどの解説があるが、そのうち利用法に関する記述はわずかでであり、ほとんどは創生神話におけるハルニレの役割についての類話の紹介で占められている。それに対し散文説話のジャンルで重要な役割をする樹木神として採録例の多いカツラ、エゾマツの解説はいずれも1ページに満たず、数行の利用法を中心とした解説があるのに留まっている。この両樹種についても位の高い神として描かれた口承文芸のデータは現在数多く採録公開されているので、アイヌの樹木神に関する情報がこの文献で公平に取り上げられているとは言えないということになる。しかしこの大著以後六十有余年間これを超える研究上の成果が現れていないということもまた事実であり、知里の偉業を本當の意味で活

かしていくためには、後進である我々がデータを補完し検証しつつ利用していくという姿勢が不可欠である。

そして知里以外でも樹木神の伝承について議論が尽くされたとは言いがたい、概略を述べたに過ぎない記述が散見するのみである。

トドマツ、オンコ、クルミ、ハギ、カバなどは説話の中に名称としており込まれ繰返されはするものの、それ自身主題としての説話は聞かれません。カツラにありましては精霊信仰説話と認むべきもの、カシワに於ては、はやくから神木としてまた人捕カシワの奇談をもつて語られています。(吉田一九五七)

(前略) それらの樹々は人々に家屋や道具類・器具類や薪を与えてくれ、その中にはとりわけ大事なドングリの実を付ける柏や檜の樹まであります。(マンロー二〇〇二)

ここにあげられている樹種はごく限られたものであり、しかも樹種がそれぞれ異なっている点についてはどのように説明されるべきであろうか。こうした疑問点をふまえ、資料を精査するところから始めることにしたい。

## 二、対象資料

筆者が分析の対象とした資料は、アイヌ民族博物館所蔵音声

資料である。研究機関のみならず日本の一般家庭でもカセットテープが普及した一九八〇年代に、同館においても同媒体でアイヌ語話者より聞き取り調査を行った資料の録音時間がのべ約六七〇時間、そのうち口承文芸データは約一〇三時間に及び、ジャンルは英雄叙事詩、散文説話、神話、言い伝えなど約二四〇編を数える。同館における聞き起こし作業の端緒はほぼ四半世紀前に遡るが、当初はわずかな予算しか確保できず事業が度々中断することもあった。外部の研究者の協力を仰ぎつつ本格的に聞き起こしとその公開が事業化されたのは二〇〇七年以降のことであり、以後はインターバルがありつつも現在に至るまで作業は継続されていて、今では文化庁アイヌ語アーカイブ事業として資料が順次公開されるに至っている。筆者自身はこの一連の事業を通じ一貫して口承文芸資料の聞き起こし及び梗概化を担当して来たのであり、そこには筆者が研究テーマとする樹木神の伝承についても貴重なデータが含まれていた。これらに加え、すでに公開された資料で樹木神が人を救済することが主題となり、且つストーリーの詳細がわかるもの二十七編を選んだ。タイトル、著者(訳者)、発行(公開)年、公開形態、伝承地域、(判明している場合の採録年と伝承者名)の順に以下列記する。

一、「桂の精霊」吉田巖 一九六五年 梗概 沙流地方

二、「ウホシサパウシ」萱野茂 一九七七年 梗概 沙流地方

(一九六五年採録 貝澤とうるしの)

三、「カツラの木に育てられたアイヌ」萱野茂 一九七七年 梗概 静内地方(一九七二年採録 福島をまつ)

四、「無題」更科源蔵、更科光 一九七七年 梗概 沙流地方

五、「びんぼうアイヌとりゆう」萱野茂 一九八〇年 梗概

六、「ベッキタイの村長の次男の話」切替英雄 一九八三年 アイヌ語対訳 旭川地方(一九六七年採録 杉村キナラブツ

ク)

七、「エゾマツの女神」萱野茂 一九八八年 梗概 沙流地方

(一九六五年採録 木村きみ)

八、「カツラの木の女神」萱野茂 一九八八年 梗概 沙流地方

(一九六五年採録 貝澤とうるしの)

九、「私の名はイクレスイエ」萱野茂 一九八八年 梗概 沙流地方(一九六一年採録 鹿戸まりや)

十、「ブクサの魂」萱野茂 一九九三年 梗概

十一、「立ち木と取ったすも」萱野茂 一九九三年 梗概

十二、「便所にお椀を入られたニシパの命を救った女の話」大谷洋一 一九九八年 アイヌ語対訳 沙流地方(一九九六年採録 小川シゲノ)

十三、「ネコに殺されそうになった友人を助けた男の話」大谷洋一 一九九九年 アイヌ語対訳 沙流地方(一九九六年採録 上田トシ)

十四、「アイヌエンジュの神に助けられた娘の話」安田千夏 二〇〇七年 梗概 静内地方(一九八一年、一九八八年採録 織田ステノ)

十五、「バナウンベとハルニレの木」安田千夏 二〇〇七年 梗概 静内地方(一九八〇年、一九八一年採録 織田ステノ)

十六、「居候の男に言い寄られメスマにされた奥さん」安田千夏 二〇〇七年 梗概 静内地方(一九八八年採録 織田ステノ)

十七、「私をかじって！」と言う声に呼び止められた男」安田千夏 二〇〇八年 梗概 静内地方(一九八一年採録 伝承者非公開)

十八、「行方不明になった子供が木の神に助けられた」安田千夏 二〇〇八年 梗概 静内地方(一九八二年採録 織田ステノ)

十九、「キキンニオツカイ」安田千夏 二〇一五年 梗概 静内地方(一九七九年採録 織田ステノ)

二十、「シリマオツテ」千葉大学 二〇一五年 アイヌ語対訳 沙流地方(平賀さだも)

二十一、「スルクマツ チクベニカムイ イカオピユーキ」千葉大学 二〇一五年 アイヌ語対訳 沙流地方(貝澤とうるしの)

二十二、「モシリバサリヒタ ソアタイ タックス アラパアン」千葉大学 二〇一五年 アイヌ語対訳 沙流地方(木村きみ)

二十三、「ランコカッケマツ」千葉大学 二〇一五年 アイヌ語対訳 沙流地方(貝澤とうるしの)

二十四、「イクレスイエとミズナラの神」安田千夏 二〇一七年

アイヌ語対訳（音声つき） 沙流地方（一九八七年採録 川上まつ子）

二十五、「エゾマツの女神と魔鳥」安田千夏 二〇一七年 アイヌ語対訳（音声つき） 沙流地方（一九八五年、一九九九年採録 川上まつ子、上田トシ）

二十六、「村長の家に嫁いだ貧しい娘とヤナギの神」安田千夏 二〇一七年 アイヌ語対訳（音声つき） 沙流地方（一九八七年採録 川上まつ子）

二十七、「おばあちゃんとヤマブドウ」安田千夏 二〇一七年 アイヌ語対訳（音声つき） 沙流地方（一九八七年採録 川上まつ子）

### 三、「人助け樹木神」伝承の概要

アイヌの散文説話で神と人との関わりがテーマになったものの中には、多くの民族で見られる「人と生物（神）の婚姻譚」も少なからずある。しかし日本民話に見られる「木魂婿入」のような、人と樹木神の婚姻例というのは管見の限りなく、あるとしても稀なケースでしかないだろう。多くみられるのは「救済者」樹木神と「被救済者」人という関係性であった。救済される理由はその人の人間性が優れているからという話もある一方で、普通の人がたまたまそこにあつた木に助けを求めたところ救済されたという偶然性によるものもあり、被救済者には悪人も含まれる。人

間側が「自分がここで死んだら樹木神はひどいので苦しむことになるぞ」となれば恫喝して救済を勝ち取るケースもある。これは、アイヌ文化における神が絶対的な存在ではなく、人を守ることは神が本来するべき重要なヤクフ（役目）なのであり、その返礼として人から木幣や供物を受け取ることと神格を高めるという「持ちつ持たれつ」の関係が根底にあり、人を見守るというヤクフを怠った神は人から叱責される。人と神のやりとりは、人への慈愛に見える場合がある一方で、駆け引きのように見える場合もある。そして悪人（神）にも場合によっては改心のチャンスを与える。それは樹木神のみならず、他の生物神と人との関わりにおいても見られるアイヌ口承文芸に描かれる神の特徴的な部分ということができらるだろう。

次に前項に列記した伝承の樹種名と樹相表現、そして救済の前段について見てみることにしたい。

一、カツラ 樹相表現「大きく枝よく繁つて丁度屋根の庇が出たようになつたカツラの木」前段「主人公が木の下で一晩を明かす」

二、ハンノキ類、ヤチダモ 樹相表現「並んで手をつないだように枝がからみあつた美しい姿の木」前段「悪いクマ退治に向かう途中で守ってくれるように主人公が祈る」

三、カツラ 該当表現なし

四、カツラ 樹相表現「大きく枝を広げた立派なカツラの木」

前段「主人公が木の下で野宮をする」

五、ミズナラ 樹相表現「大きなナラの木」 前段「主人公が木の下で貧乏の理由を教えて欲しいと祈り眠りにつく」

六、カツラ、イヌエンジュ 樹相表現「高くてまっすぐなイヌエンジュ、高いカツラの木」 前段「主人公の夢に立派で神のような男性が出て来て行動を指示」

七、エゾマツ 樹相表現「大空に届くかと思われるほど太いエゾマツ」 前段「木の神に助けを求め家にする」

八、カツラ 樹相表現「立ち姿の美しいカツラ」 前段「主人公がカツラを人の大きさに切り取り、道中の無事を祈る」

九、カツラ 樹相表現「一本の太いカツラ」 前段「主人公が助けを求める」

十、エゾヤマハギ 樹相表現「五、六本固まって生えている」 前段「なし」

十一、ヤナギ類、ハルニレ 樹相表現「並んで立っているひと抱えできる太さの木」 前段「なし」

十二、ミズナラ、ヤナギ類 樹相表現「2本がくっついて立っていた」 前段「なし」

十三、ハルニレ 樹相表現「とても大きなハルニレ」 前段「供物をまいて木に捧げていた」

十四、イヌエンジュ 樹相表現「大きなイヌエンジュの神」 前段「樹木神が主人公に夢を見せ、行動を指示する」

十五、ハルニレ 樹相表現「大きなハルニレ、大きく育った大

地を司る神」 前段「主人公が悪神に襲われ、ハルニレの方向に逃げて助けを求める」

十六、樹種名未詳 樹相表現「大きな大地を司る神」 前段「主人公が木の神に助けを求めて祈る」

十七、イヌエンジュ 樹相表現「大きなイヌエンジュ、大きな大地を司る神」 前段「木の神が声を発し主人公に行動を指示」

十八、樹種名未詳 樹相表現「老木、大地を司る神」 前段「なし」

十九、ナナカマド 樹相表現「なし」 前段「主人公がナナカマドの林の中で育った」

二十、ミズナラ 樹相表現「立ち姿が美しいミズナラ」 前段「主人公が木の下で神に助けを求める」

二十一、イヌエンジュ 樹相表現「なし」 前段「主人公の家の祭壇のところに一本のイヌエンジュが立っていた」

二十二、樹種名未詳 樹相表現「腐った倒木」 前段「主人公が倒木から枝を切り出し加護を祈る」

二十三、カツラ 樹相表現「ひこばえの、立ち姿が美しい、太いカツラ」 前段「主人公が木を切り出し、人の姿に作り加護を祈る」

二十四、ミズナラ 樹相表現「とても太い大きなミズナラ、枝も良く、木材の質も良いミズナラ」 前段「なし」

二十五、エゾマツ 樹相表現「とても大きなエゾマツ」 前段「主人公が木の下で祈り眠りにつく」と、木の神が夢に現れて行動を指示」

二十六、ヤナギ類 樹相表現「不明」前段「主人公が木のまわりをいつもきれいに掃除していた」

二十七、ヤマブドウ 樹相表現「なし」前段「主人公が木のまわりをいつもきれいに掃除していた」

救済の具体的な方法については、主人公が実際の樹木に「触れる」「かじる」「木片を身につける」など直接的な接触をする描写が多く見られる。これは双方移動可能な生物神と人が一対一で対する場合は異なり、森林という空間に数多ある樹木の中でどの樹木と救済関係にあるのかということ聞き手に明確に示すための手法であるとも言えるし、独特の香りなど樹木神特有の力を人に譲渡するための有効な手段であるとも言えるであろう。またその一方で、樹木神が何をしたのか結局不明なまま大きな力が発動され、悪神が突如死んでしまうという圧倒的な展開のものもあった。

救済時の樹木神形態を見ると、樹木神が人型に変身しないものが人型に変身するものをはるかに上回っていた。つまり樹木神が救済時に変身して自ら動くというケースは決して多くはなく、樹木の姿のままでも人に行動を指示し神力を発揮する場合がありますが多く見られるということになる。また倒木や切り株という姿で力を発揮するケースも見られたが、これは他の生物神においても、個体死した骨の姿でも活動する場合がありますと共通していた。

表1 「人助け樹木神」(伝承の要素比較(抜粋))

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七
樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	人間	樹木	樹木	人間	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	樹木	人間	人間	樹木(倒木)	人間	樹木	樹木	樹木(根株)	樹木
	夢	羽音(母が転生した鳥)	夢	夢	夢	夢	声	声	声	夢	声	夢	夢	声	夢	夢	羽音(母が転生した鳥)	夢	夢	声	夢	夢	夢	夢	声	



#### 四、「木にくつついて育った男の子」の比較検討

散文説話のひとつのモチーフとして、オオウバユリの根を採取している間に赤ん坊が悪神や魔物にひどくわかさされてしまわれてしまうというタイプのものがあり、その中に「樹木神が助けた」と明確に語られているものがある。そのひとつは「カツラの木に育てられたアイヌ」と題された和訳が公開されている（萱野一九七七）。それは妖怪にさらわれてしまった子供が「カツラの木の女神」に助けられて木にくつついて育つという物語であり、バックデータは「静内町農屋 語り手 福島そまてっさん」とある。

一方でアイヌ民族博物館収蔵資料に「山でオオウバユリ掘りをして子どもが行方不明になる話」という伝承の採録があり、二〇〇八年に梗概がWEB公開されている。この資料は萱野一九七七と同地域で採録された資料で、話者は織田ステノ氏である。両伝承の採録年にはちょうど十年の開きがあるが、同じ地域で採録されたものであるためか伝承の内容が大変よく似ている。主な要素と相違点を図に整理すると表2のようになる。要素1と要素2の順序が入れ替わっているために、アイヌ民族博物館資料では途中で自叙者の交代が起きているが、萱野資料では自叙者が最後まで交代しない点に注意したい。

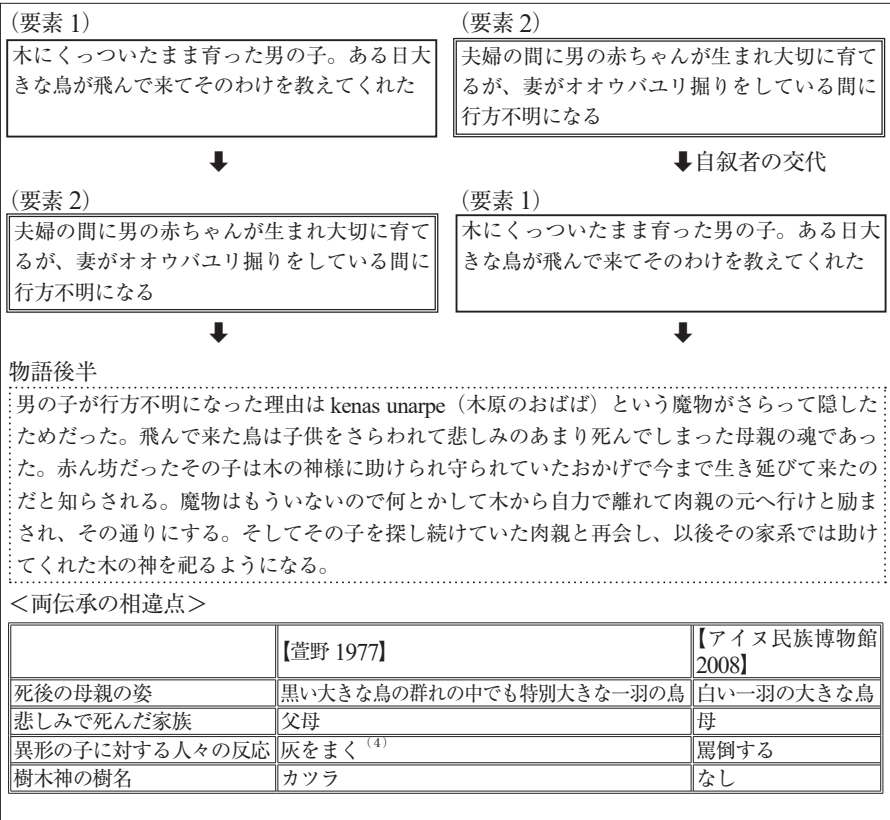
本稿のテーマに関わる大きな相違点は、萱野一九七七で救済をする樹木神の和訳がカツラとされているのに対し、アイヌ民族博物館二〇〇八では樹種名が語られていないという点である。

後者の音声を確認すると、そこではシリコロカムイ（大地を司る神）という樹木神を抽象的に表現する言葉しか用いられていない。萱野一九七七は原資料が未確認であり、そこで語られた樹種名が本来何であったかについては現時点では不明という他はない。以下は筆者の推論であるが、訳者の出身地である沙流地方はカツラが神格の高い神であるという話が数多く採録されている地域である。この伝承がその地域にもたらされたことにより、樹種名のない伝承に「カツラ」の名が情報として付加された可能性も否定できないのではあるまいか。<sup>5</sup> 樹木神の伝承では、樹木の特徴が物語中の鍵となりその木でなければ話が成立しないものがあるが、この伝承はカツラでなければ成立しないわけではなく、他の樹種への交代がさしたる矛盾や破綻なく起り得るタイプの伝承であると言える。静内地方の伝承者がアイヌ民族博物館で語り残した八十編を超える散文説話のなかで、カツラが重要な神として語られたものは一例もなく、繰り返し人助け樹木神として語られているのがイヌエンジュであるという事実も、この説のひとつの論拠となり得るだろう。

ちなみにこの散文説話と似たモチーフの伝承は、沙流地方では聖伝、神話というジャンルで採録されている。しかしそれらは樹木神が助けたという要素が明確に語られていない場合もあ



表2 【萱野 1977】【アイヌ民族博物館 2008】



り、いずれの例にも樹種名は出て来ない。

「無題」

文献及びデータ…金田一 一九三二 公開形

態…和訳

伝承地域…沙流地方 伝承者…鍋沢ユキ

ジャンル…聖伝(オйна小曲) 折り返ししのフ

レーズ…ホーレー ホーレー

主人公(自叙者)…若きアイヌラツクル 樹

木神との関わり…「木々の神が おん身を 育てて」

「人間の少年の自叙」

文献及びデータ…久保寺 一九七七(神謡

八十八) 公開形態…アイヌ語原文対訳

伝承地域…沙流地方 伝承者…平賀エテノア

ジャンル…神謡 折り返ししのフレーズ…

Rukanika huvo

主人公(自叙者)…ある少年 樹木神との関

わり…不明

「悪い神にかどわかされた少年の自叙」

文献及びデータ…久保寺 一九七七(神謡

八十九) 公開形態・アイヌ語原文対訳

伝承地域…沙流地方 伝承者…平賀カモンヌレ

ジャンル…神謡 折り返しフレーズ…Hore eiei

主人公(自叙者)…ある少年 樹木神との関わり…不明

以上のことから、時として伝承にみる樹種名は、地域によりまた場合によつては人により左右される性質のものである可能性を指摘しておきたい。樹種名から説明するという従来の研究に見られる視点のみではなく「名のない樹木神」の伝承も視野に入れつつ整理していくべきであるという今後の方針を見出すことができたように思う。

## おわりに

樹木神に関する伝承は散文説話の中にも様々なタイプがあり、「人助け樹木神」はその中のひとつの形式に過ぎない。しかしそこに描かれているのは、受動的な存在と見なされがちな樹木が能動的に人助けをするという奇想天外さもさることながら、ある事件をきっかけにして人と樹木神の縁が結ばれたことを示す、主人公の家系にとつての重要な信仰に関わる由来譚となっている場合があり、アイヌの生物神を考える上で示唆に富んでいる。こうしたモチーフのストーリーを特に「カムイウエベケレ(神の散文説話)」と呼び、聞きどころのある話として語り残した伝

承者がいるところから見ても、語り手自身もそのタイプの話の重要性を認識していたと思われる。このモチーフをひとつの基準として、他の生物神と人の関わり共通点や相違点を整理していくことには大きな意味があるように思われた。

このタイプの伝承に登場する樹種名は高木類が多かったものの、樹種名自体は地域もしくは人によつて変わる可能性を有しているという点を指摘した。しかし本稿で対象とした資料の性格上、北海道日高地方の検討に偏つてしまった感は否めない。これ以外の地域については今後の課題としていきたいと考えている。

## 附記

本稿は二〇一六年六月五日に北海道大学において開催された日本口承文芸学会第四十回大会の研究発表を骨子とし、その後本学会員諸氏に多大なるご助言を賜りつつ加筆修正したものである。諸氏に記して感謝申し上げます。

## 注

(1) 話者が来訪者からかつて口にした話を筆録したという可能性もないわけではないが、その場合も荒唐無稽な話をしたというのではなく、口承文芸にある話を引き合いに出してからかつたと考えていいように思う。

(2) 「木にくつつく」というのは、幹や枝の樹皮内側に形成層

があり樹木本体に触れた異物は時間をかけて体内に取り込んで行くという樹木の成長の理屈と性質に合致している。

- (3) 採録年月日は萱野資料一九七二年九月十七日。アイヌ民族博物館資料一九八二年十一月二十七日。

- (4) アイヌ文化では、灰は火の神から生まれたものであるため魔を祓う力を持つと考えられており、魔物の類はこれをまくと逃げて行くとされている。これをまいても逃げないということとは邪悪なものではないことの証明になる。

- (5) 口承文芸とは伝えられて行く過程で変わっていく宿命を持つのであり、樹種名が変化することそのものを問題視するつもりはない。ただその可能性がある以上、それが起きた背景を追求したいと考えているのみである。もちろん原資料ではやはり樹種名はカツラであるという可能性も現時点で否定されるものではない。

- (6) 織田ステノ氏は「ランコカムイメノコ(カツラの女神)の散文説話の存在について言及しているが、アイヌ民族博物館資料では記録されなかった。

#### 参考文献・データ

アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブス』二〇〇七―二〇〇八

一般財団法人アイヌ民族博物館 (web)

アイヌ民族博物館『アイヌと自然デジタル図鑑』二〇一五

一般財団法人アイヌ民族博物館 (web)

アイヌ民族博物館『アイヌ語アーカイブ』二〇一七 一般財団法人アイヌ民族博物館 (web)

アイヌ無形文化保存会(編)『アイヌの民話1』一九八三 財団法人アイヌ無形文化保存会

大谷洋一「小川シゲノから上田トシへの伝承2」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要4』一九九八 北海道立アイヌ民族文化研究センター

大谷洋一「ネコに殺されそうになった友人を助けた男の話」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要12』二〇〇五 北海道立アイヌ民族文化研究センター

小澤俊夫『昔話のコスモロジー』一九九四 講談社学術文庫

萱野茂『ウエベケレ集大成 第1巻』一九七四 アルドオ

萱野茂『炎の馬』一九七七 すずさわ書店

萱野茂『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチポロ』一九七九 平凡社

萱野茂『キツネのチャランケ』一九八〇 小峰書店

萱野茂『カムイユカラと昔話』一九八八 小学館

萱野茂『萱野茂のアイヌ神話集成5』一九八八 ビクターエンターテインメント

金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究1』一九三一 東洋文庫

久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神話・聖伝の研究』一九七七 岩

波書店

国立大学法人千葉大学『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書1／3』二〇一五a 国立大学法人千葉大学

国立大学法人千葉大学『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書2／3』二〇一五b 国立大学法人千葉大学

国立大学法人千葉大学『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次（北海道沙流郡平取町）調査研究報告書3／3』二〇一五c 国立大学法人千葉大学

更科源蔵 更科光『コタン生物記1 樹木・雑草篇』一九七六 法政大学出版局

ジョン・バチェラー『アイヌの炉辺物語』一九二五 富貴堂書房 (John・batchelor『ainu fireside stories』一九二四 Kyobunkan)

關敬吾（小澤俊夫補訂版）『日本昔話の型』二〇一三 小澤昔ばなし研究所

知里真志保『分類アイヌ語辞典 第一巻 植物編』一九五三 日本常民文化研究所

中川裕『アイヌ口承文芸テキスト4 白沢ナベ口述 ナナカマドのイナウで伝染病の神を倒した』

『千葉大学ユーラシア言語文化論集』二〇〇三 千葉大学ユーラシア言語文化論講座

中川裕『アイヌの物語世界』一九九七 平凡社  
ニール・ゴードン・マンロー、小松哲郎（訳）『アイヌの信仰とその儀式』二〇〇二 国書刊行会

北海道教育庁振興部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形文化財1』一九七六 北海道教育委員会

北海道教育庁振興部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財2』一九七七 北海道教育委員会

北海道教育庁社会教育部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財3』一九七八 北海道教育委員会

北海道教育庁社会教育部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財4』一九七九 北海道教育委員会

北海道教育庁社会教育部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財5』一九八〇 北海道教育委員会

北海道教育庁社会教育部文化課『アイヌ民俗文化財緊急調査報告書 無形民俗文化財6』一九八一 北海道教育委員会

吉田巖『愛郷譚叢』一九五七 帯広市教育委員会

吉田巖『アイヌ童話 帯広市社会教育叢書第十巻』一九六五 帯広市教育委員会

（やすだ・ちか／アイヌ民族博物館）